

硫黄欠乏対策により水稲収量大幅改善（世羅町）

【平成 30 年 1 月 5 日 掲載】

12 月 21 日、世羅町の（農）聖の郷かわしり（代表理事 川邊澄男（かわべ すみお）、構成員 43 名）において、理事 5 名が参加し、水稲収量改善に係る 3 年間の取組総括と次年産に向けた対策検討を行いました。

同法人ではここ数年、水稲収量の伸び悩みに課題を抱えており、東部農業技術指導所では、この根本要因の解明を行ってきました。H27 年には、近隣法人との生育比較から当該法人の水稲は「初期生育の停滞が著しい」ことを確認。H28 年には初期生育停滞を引き起こす要因は硫黄欠乏であるとの仮説設定の下、実証圃設置による検証を行い、低収の根本要因は硫黄欠乏であることを特定しました。3 年目の H29 年は、硫黄欠乏対策として地元育苗培土製造メーカー及び関係機関と連携し、硫黄供給源として育苗床土に石膏を事前混和する対策を行いました。



この硫黄欠乏対策実施によって、大幅に初期生育が改善され、主力品種のコシヒカリでは 60kg/10a の収量改善が図られるとともに、登熟向上に伴う食味向上（タンパク含量の低減）効果も確認しました。

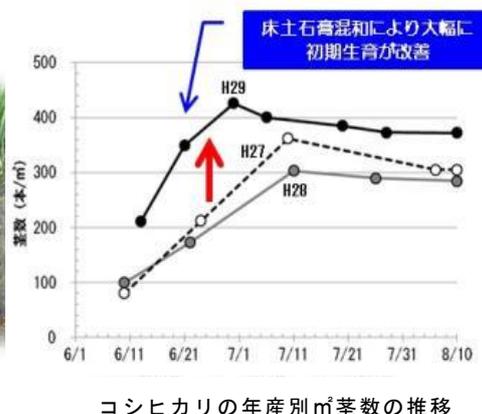
法人側からは「対策実施によって目に見える改善効果が現れた。対策に要したコストはわずか 370 円/10a 程度で、60kg/10a の収量改善が図られたことは経営的に大きなメリットがある。」との感想がありました。次年産は、本年度対策ができなかったヒメノモチを含め、全品種での対策を行う計画で、さらなる収量向上が期待されます。

世羅町内では、硫黄欠乏が原因で低収を招いていると思われる経営体が他にも見受けられ、この取組事例を参考に次年産に向けた対策を行う予定です。

指導所では引き続き、収量に課題を抱える経営体について、低収という漠然とした課題を複数の要因に細分化し、根本要因の特定と改善実施によって課題解決を図る経営体の主体的な取組を支援していきます。



田植後約 1 か月後の様子
（左：H27、右 H29（硫黄欠乏対策実施））



コシヒカリの年産別 m² 穂数の推移